

第 10 回日本放射線安全管理学会学術大会 印象記

加藤 真介
Katoh Shinsuke

平成 23 年 11 月 30 日(水)～12 月 2 日(金)の 3 日間、東京工業大学すずかけ台キャンパス(横浜市)にて、第 10 回日本放射線安全管理学会学術大会が開催された。当キャンパスは東京駅から電車で 1 時間ほどの距離に位置し、会場となったすずかけホールへは最寄り駅から徒歩数分でたどり着くため、アクセスは申し分ない会場設定であった。現場の放射線管理に関わっている人だけではなく、環境調査や測定器・管理システムの開発、又は教育や放射線に関する基礎的研究に関わっている人など様々な方面の専門家を中心に 250 名以上の参加者があった。

開会に先立ち、大会長である野村貴美氏(東京大学工学部)より、設立 10 周年に当たる今大会に向け早くから企画を検討していたが、奇しくも東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所事故が発生し、その内容を大幅に変更した旨の報告があった(写真 1)。さらに学会長の榎本和義氏(高エネルギー加速器研究機構)より、今回の事故への学会としてのこれまでの及び今後の取組みについて報告がなされた。

引き続き、渡辺格氏(文部科学省科学技術・学術政策局)による事故発生以降の環境モニタリング状況についての特別講演があり、モニタリングでは第 1 段階の迅速性と第 2 段階の正確性を重要視しており、その結果を広く公開しているとのことであった。また特別講演 2 では、森口祐一氏(東京大学大学院工学系研究科)により放射性物質で汚染された廃棄物・汚泥・土壌への対処についての説明があり、廃棄物処理



写真 1 大会長による開会宣言

法など従来の法令では対応が困難といった直面する課題について解説がなされた。前記 2 題の特別講演で、環境汚染の現状とその処理の問題の概要を把握することができたため、関連発表の理解に役立った。これらの講演を初日に行ったのは適確なプログラム構成であったと思う。

2 日目には、招待講演と 2 つのシンポジウムが一般公開され、30 名以上の一般市民が聴講した(写真 2)。招待講演では、Vadim Chumak 氏(ウクライナ国立医科学アカデミー)によるチェルノブイリ原発事故後の大型疫学的研究が紹介された。講演後の一般聴講者からの質問に対し演者は、今後も正確な線量の公開と健康スクリーニングの実施は継続的に行っていくべきであるが、福島事故による環境放射線量の増加は少ないため、発がんへの影響を見出すことは難しいだろうとコメントしていた。第三者的立場にある海外の専門家によるこのような発言



写真2 一般公開時のフロア

は、日々不安をかき立てられる報道に多く接している一般の方々にとっては、事態を冷静に眺めるきっかけの1つになったのではないだろうか。

続いて行われたシンポジウム1では、「放射線の生体への影響」と題し、分子レベルから個体影響を理解することを目指して3題の講演が組まれていた。最先端の研究結果も交えた大変興味深い内容で満たされ、放射線生物学を広く俯瞰することができた。ただし、一般聴講者には多少難しすぎたかもしれない。続くシンポジウム2では、「放射線教育」と題し、専門家が一般公衆に対しどのように放射線に関する知識を伝えるべきかについて3人の演者の試みが紹介された。放射線・放射能に対する一般公衆の関心が高くなっている現在、放射線管理に携わっている者にとっては大変参考になる内容であったと思う。

3日目には、今回の事故に関する学会の取り組みの1つである“放射性ヨウ素・セシウム安全対策アドホック委員会”の活動報告がなされた。被服、茶葉、土壌の放射能測定結果が各分析班から報告され、さらに土壌分析班より“個人住宅を対象とするホットスポットの発見/除染マニュアル”の紹介があった。身近なサンプルの測定法の工夫や結果の分析は、日常生活に直結する問題でインパクトも大きかったため、活発な質疑応答がなされていた。

午後には特別講演3として、笠置文善氏（放射線影響協会）より原子力発電施設等で放射線業務に携わる従事者を対象とした健康影響の追

跡調査結果が紹介された。低線量・低線量率の放射線が人体に与える健康影響は現在のところ解明されていないため、このような大規模かつ長期に及ぶ疫学的研究は大変有意義である。財政的問題から予算確保が厳しさを増しているようであるが、このような一朝一夕では得られない情報収集は、是非継続してほしいと感じた。

3日間にわたる特別講演等の合間に設けられたセッションでは、2会場にて39題の口頭発表が行われていた。また2日目の午前には44題のポスター発表の時間も設けられた。例年の大会とは趣が異なり、大気、土壌、水、食品中などの放射能測定の結果やその除染対策方法に関する研究発表が多く見受けられた。また3日目の午後には、平成22年度の学会誌に掲載された論文から選出された最優秀論文賞3タイトルの受賞講演も行われた。会員による多くの発表を聴講し、放射線安全管理を学問として位置付けるという当学会の設立目的は達成されつつあると感じた。

大会の締めくくりとして、初代会長である西澤邦秀氏（名古屋大学名誉教授）による記念講演が行われた。ここで話された内容は、創立時の裏話・苦労話といった記念講演でよくみられる過去を偲ぶようなものではなく、原発事故に対応した具体的制度が現在はなく、早急に包括的放射線安全管理体制を確立すべきであるという警鐘的なものであった。正に当学会が進むべき道の1つが示された講演であったと思う。

従来、放射線安全管理は自身が管理する施設内で完結していることが一般的で、外部に向けて情報を発信することはあまり多くなかったように思う。しかしながら、原子力災害という残念な出来事がきっかけではあるものの、放射性物質の汚染検査、除染方法、放射線量の把握、被ばく管理など放射線管理の重要性を改めて認識させられる状況となり、多くの会員が少しでも社会に貢献できる成果を上げたいという思いで活動していることがひしひしと伝わってきた。当学会の存在価値・意義を強く感じる事ができた有意義な大会であった。

（横浜薬科大学）